――目　次――

1　酒の席　002

2　脅迫　020

3　寝室にて　036

※この作品はフィクションです。
実在の人物や団体などとは関係ありません。

1　酒の席

「あの性悪クソ賢者め！」

ヘンリックはテーブルにジョッキを叩きつけた。が、怒りは収まらない。

もうこれで何度目になるか。

国王に一目置かれる宿敵――大賢者ことレスターは本日も王宮の会議室でヘンリックの研究成果をけなしてきた。

曰く――錬金術の基礎教養を忘れてしまったかのような論文だとかなんとか。それが一回で終われば許せた。

だが理路整然とした反論が合計十二回。

十二回だ。
しかも今日は議場に国王陛下がお越しになる日で、宮廷錬金術師としては一世一代の晴れの日だった。
それをあの憎たらしい、白金髪（プラチナ）に碧眼の眉目秀麗な大賢者さまに容赦なく批判された。
これが飲まずにやってられるか！
「酒」
据わった目でバーテンに空いたジョッキを押しつける。
と、背後から声をかけられた。
「荒れてるなぁ。宮仕えってのはそんなに大変なのかい？　兄ちゃん」
ガタイのいい冒険者崩れの男だった。ドワーフの血でも混じっているのか長いヒゲに白い泡がくっついてる。

普段のヘンリックなら相手にもしないタイプだ。
しかし今夜は宿敵にこっぴどくやりこめられ、ひと晩一緒に飲み明かしてくれる仲間が欲しい。
「おれも今夜は狙ってた獲物に逃げられちまってよ。やけ酒なら付き合うぜ」
「よし。じゃあ俺もあんたに奢(おご)る！」
さっそくバーテンに頼むと、苦笑しながら満杯のエール酒につまみまでサービスしてくれた。
今日はなんていい日だ。
粗暴な輩が多い冒険者と話すのも悪くない。
ヘンリックはうれし涙をにじませながら、新たな乾杯をとった。

「でなぁ。本当に最悪なんだ。あのクソ賢者！」
「まったくだ。おれが知ってる奴も元は尻軽な遊び人だったクセによぉ。今じゃ大賢者さまだ」
がはは、と威勢のいい笑い声を聞きながら互いに肩を組んで管を巻く。
もう気分は親友だ。
カウンターで席を並べたまま飲み始めること数時間。
男の名はドリンと言って、予想通りドワーフの血が四分の一入っていた。
でかい体格のわりに手先が器用で、三つ編みのヒゲも自分で編み込んでいるらしい。なにより根が明るい。
レスターのように陰湿（いんしつ）じゃない。

奴は顔だけは綺麗だが、しゃべり方ひとつ取っても嫌味ったらしい。
なにせ口癖は――
「失敬。私の聞き間違いでなければって毎回言うんだ！　あれにはおれもウンザリしたぜ」
ドリンが今いったセリフは一言一句違わず、レスターが議場で良く言うセリフだ。
同じ賢者でこうも似るものだろうか？
ドリンの言葉はさらに続く。
「しかも。しかもだぜ。昼間はあんなに嫌味ったらしい口きくクセにおお。いざ夜になったら、毎晩おれの下であんあん可愛い声で啼いてんだ。まあ、奴が神殿で啓示を受けたジョブが「遊び人」だったってのもあるがよ」

――遊び人。

冒険者たちに多大な幸運をもたらすといわれているが、その戦闘能力は低くパーティーに入れたがる冒険者は少ない。そのせいか今では幻のジョブと言われて久しい。

ヘンリックは頭を振って酔いをさました。

今、酔っぱらうとなんだかとても重要な情報を聞き逃してしまう気がしたからだ。

バーテンがずいぶん前に置いてくれた酔い覚ましのぬるい水を飲み干して、ドリンに向き直る。

「なぁ、遊び人を入れるなんて、あんたんとこはずいぶん余裕のあるパーティーだったんだな？」

「そりゃあそうよ。といっても無能力者を雇えるほどウチも暇じゃねえ。

だから代わりに夜のあれこれを面倒見てもらってたわけさ。なにせ男だけのむさ苦しいパーティーだ。顔だけなら女でも通じるきれいな奴だったからな。色々教えたらこれが飲み込みの早い奴でよ。夜になったらおれらが逆に搾り取られる始末で、ありゃ～ひどかった」

そういう割にドリンの顔はニヤついていた。

――もっと酔わせて喋らせろ。

ヘンリックの勘がそう言っていた。

「……そんなのでも賢者になれたのか？」

「それよ。おれも驚いたんだが『経験』の数が大切らしくってな。奴め。賢者さまに昇格したら今までは抱かせてやってたんだとか言い出して、パーティーを抜けるって言い出してよ。もうあんなにひどい修羅場はおれも人生初だ。リーダーがあいつに相当入れ込んでてな。心中一歩手前

まで行ってパーティー解散よ。結局雇い主のおれらが逆に利用されてたって訳さ」

ドリンが在りし日の光景を思い出して、遠い目を浮かべる。

その話にヘンリックはかつて錬金術研究所で起きた事件が脳裏をよぎった。

昔、それはもう愛らしい女錬金術師が研究所入ってきて、数ヶ月は何事もなく平穏無事に時間が過ぎた。

――だがしかし、彼女が研究員たちと合計十股し、所内の人間関係を上から下まで崩壊させたという前代未聞の醜聞（スキャンダル）が起きた。なんでも相手は妻子持ちの研究所長から学校出たての新人までありとあらゆる男が対象だったという。

ドリンの話は、その恐ろしい伝説を思いおこさせる内容だった。

「ま、おれは幸運にもそのあと手先の器用さを買われて今の仲間の世話になってるが、遊び人だけは雇うなと口を酸っぱくして言ってる。ありゃあ淫魔の再来だ」

うんうんと何度も力強く頷く姿は経験者だけが語れる実感がこもっていた。

「そうなると今、賢者として君臨してる奴はみんなそうなのか？」

「まさか。大半の賢者さまは神殿で徳の高い修行を積まれて、ようやくなれる。そういう代物だ。そもそも遊び人の啓示自体めったに出ない。だから遊び人から賢者になりあがった奴なんてごく少数じゃないか」

しかしドリンの語った賢者さまは奴と、あのレスターとそっくりなのだ。特に口癖が。

（……一言一句同じなんてこと、あるか？）

口元に手をあてて考え込んでいると、ドリンがどうした？　と心配そうに声をかけてくれた。

――違っていてほしい。

でも、もし奴が遊び人出身ならこれはチャンスじゃないか？

賢者になれたあと奴はドリンたちのパーティーを抜けると言ったのなら、そいつは遊び人だった過去と決別したくて言った可能性もある。

それをネタに奴の高慢ちきな鼻っ柱をへし折ることだって――

ごくり、と大きく唾を飲み込んだ。

ドリンのヒゲ面をまじまじと見つめて、口をひらいた。

「なあ、その遊び人の名前教えてくれないか？」

◆◆◆

レスターは上機嫌だった。

今日この夜という特別な日のためにとっておいた四十年物の最高級ワインを注ぎ、グラスの中で小さく揺らす。それだけで芳醇（ほうじゅん）な香りがたちのぼり、愉悦をもたらしてくれた。

今住まう屋敷は国王陛下から受け賜ったもので、ありとあらゆる贅（ぜい）をこらした調度品を置いている。なかでも今腰をおろしているソファはレスターの細身の身体にもぴったりフィットするよう設計されていた。めったに手に入らない黒霊牛の革張りで、天井に吊るしたシャンデリアの光を受けて、黒光りしている。

寝間着の純白のローブにもよく映えた。袖口には金糸の刺繍がたっぷりふちどられ、部屋の持ち主の威容を高めていた。

「フフッ」
自然と笑みがもれる。
なにせ今日は長年、目の上のたんこぶだった男を国王陛下の面前で完膚(かんぷ)なきまでに理論で圧倒してやったのだ。しかも奴が昔、放棄した錬金術理論で。
議場でどんどん青ざめていくヘンリックの顔ときたら。あれほど胸のすく出来事があっただろうか？　いや、無い。
ここまで来るのに五年もかかってしまった。
生まれて初めて訪れた神殿で申し渡された啓示ときたら、魔術を究(きわ)めるのとはほど遠い堕落した職――遊び人だった。
だれが好き好んであんなものになりたがるか。
魔術を究める代わりに男に抱かれ、イッた回数が文字通り経験となる。

だがレスターが手に入れたかったのは魔術を学ぶ時間そのものだ。男に抱かれる時間などではない。

必要な回数を経験すればさっさと抜けるはずだったパーティーで、リーダーの男にしつこく留まるように脅された。

――お前も俺のことが好きなんだろ？　じゃなきゃあんなにセックスしたりしない。違うか？

今思い出しても腹が立つ。賢者に昇格するのに必要な経験回数が自慰で済むなら済ませていたとも。けれど遊び人だった頃は、レスターの身体が男に抱かれることを望んでいた。

早く、速く、もっと、たくさん交われ。

まるで魔術の勉学に励みたかった気持ちが体内で変質したかのように、男たちとのセックスを求めていた。

「――ッ」

当時のことを思い出したせいで身体が熱くなる。尻がむずむずとして細い肉茎が勝手に勃ちあがった。

もう賢者になれたのだから、こんな肉欲は必要ない。なのにレスターの身体は今もたまに『男』を求めてしまう。

「くそ」

ワインを呷(あお)る。かぐわしい香りで獣欲を打ち消そうとするが、一度火のついた身体は簡単には静まってくれなかった。

グラスをテーブルに置いて金刺繍のあしらわれたベルトをゆるめる。

どうせ今夜この屋敷を訪れる人間はいない。一回出せば収まるはずだ。

（あの頃のように男に抱かれるなど冗談ではない……ッ）

過去はすべて切り捨てた。かつて所属したパーティーは崩壊し、冒険

者ギルドの一覧にもその名はない。レスターを抱いた男たちは皆その後行方知れずだ。祖国から海をはさんで遠く離れたこの地に、あの爛(ただ)れた過去を知るものは誰もいない。

そう思った瞬間、部屋の呼び鈴が鳴った。

「ッ！　なんだ！」

思った以上に強い声でとがめてしまった。扉越しに執事の声が響く。

「申し訳ございません。夜分遅くにお客様でございます」

「客だと？　追い返せ」

今晩は長年の宿敵を追い落とし、宮廷での地位が盤石(ばんじゃく)になった最高の夜だ。そんな日に招待する客などいない。

ところが扉の向こうから執事の悄然(しょうぜん)とした声が響いた。

「それが……宮廷錬金術師のヘンリック様でして。なんでもご当主さまに『遊びの手ほどきを受けたい』と言付けされました」

「‼」

それはありうべからざる言葉だった。

もうこの五年、いや今後二度と聞くことがないと思っていた言葉を、なぜ奴が言付けてくるのか。

ワインでうるおしたはずの喉が急速に乾いていく。

奴が私の過去を知っているはずがない。単なる偶然だ。

「――それともう一つお言付けを賜りました。ドリンの角は右曲がり、と」

レスターの全身から一斉に血の気が引いた。

知っている。奴はあの過去を知っている。でもどうやって？

どくどく、と心臓が大きな音を立てて急き立ててくる。ワインのせいか、鼓動がやけにうるさい。

このまま奴を帰らせるか？

ダメだ。あくまで私はこの国の魔術の権威なのだ。陛下には神殿上がりの賢者として仕えている。

もしも男に抱かれて賢者になったなどと知られたら軽蔑（けいべつ）される。そもそも軽蔑程度で済むのか？　今までに築き上げた地位、この国で花開いた魔術文化の粋（すい）、そのすべてが失われてしまう！

「〜〜ッ」

レスターの明晰（めいせき）な頭脳は、解決するにはたった一つしかないと訴えていた。

それはあまりに屈辱的な選択だ。
絶対に嫌だ。死んでもありえない。
だがこの国で今まさに新たな発展を遂げようとしている錬金術と魔術の融合を、こんな形で葬り去りたくはなかった。
数十秒。いやもっと長かったかもしれない。
長いながい沈黙の末にレスターは執事に命じた。
「通せ」

2　脅迫

ヘンリックが通されたレスターの屋敷は入口の門から豪壮かつ優美で、夜半だというのに園庭には明りまでつけられていた。

（俺も陛下の覚えがめでたければ、こうなれたのかね……）

宿敵への羨望が募る。

夜闇に鮮やかな新緑がぽう……と照らし出され、見るものに蠱惑的（こわくてき）な印象をもたらしていた。

老年の執事に連れられて屋敷に足を踏み入れると、奥まった一角にあるレスターの私室の前に通された。

ヘンリックの家はせまい下宿で、高価な実験器具も贅沢な調度品すら

ない。
まさに天と地の差だった。
「どうぞ、お入りください。主人がお待ちでございます」
完璧なお辞儀とともに扉が開かれる。通された先には、憎たらしき宿敵レスターが椅子に座ったままこちらを睨みつけていた。
とても客を迎え入れる態度ではない。
執事が去ると、レスターが口をひらいた。
「何用だ。へぼ術師」
純白のローブの裾を揺らして、奴が尊大に足を組んだ。
客に椅子を勧めもしない。
こういうところが実に嫌味な男だ。
そのくせ顔は女のように線が細く、白金の髪を後ろに流した姿は一流

貴族でも通用する。
たとえ、元「遊び人」であっても――
そもそも俺を部屋に通したということは、あの過去を知られたら困ると思ったからだ。それは間違いない。
なら俺が下手(したて)に出る必要もない。
「はっ、ドリンの角っていうのはあんたにとっちゃ忘れられない言葉みたいだったな。今度会ったら奴に礼をいっとくぜ」
「なんだと？」
眉間(みけん)に深い皺が刻まれた顔を見れて、痛快だった。
まさにドリンさまさまだ。
あのおっさんは酒を飲みながら、今までこいつをどんな風に抱いたか事細かく教えてくれた。もちろん弱点も。

つかつかと椅子に座るレスターに歩み寄り、奴を立ち上がらせないようひじ掛けに手を置いて逃げ場をふさいだ。びくりと身を引く姿は議場での澄ました態度とは大違いだ。嗜虐心(しぎゃくしん)がむくむくと沸き起こる。

「覚えてないのか？　ドリンからは、あのパーティーで毎晩あんたが奴の右曲がりの角を楽しそうにケツにくわえこんでたって聞いてるぜ」

ゆっくりとひじ掛けに乗せる体重を増やし、レスターの足のあいだに膝をわりこませた。

「ッ」

顔を近づけて、レスターの端正な表情が屈辱にゆがむさまをじっくりと堪能した。

柳眉(りゅうび)をゆがめ、氷のような碧眼に怒りをはらませている。薄い唇は怒

りで硬くこわばり、常に後ろになでつけている白金の髪が主（あるじ）の動揺が移ったのか、数房前髪が手前におちていた。

ひじ掛けに置いた手をさらに進めて、レスターの両手に重ねる。

「私にふれるな！　この痴（し）れ者が！」

激高するレスターを無視して、手首をがっちりと掴む。これで奴の脈がはかれる。

尋問開始だ。

「なんでもドリンのおっさんだけじゃなく、パーティーのリーダーやたまに入る助っ人にもケツを貸してたんだって？　二日連続で４Ｐやったとか聞いて驚いたぜ。あの大賢者さまにそんな裏の顔があるなんてな」

どくどくとレスターの脈が速まっていく。

事実だ。

本当にこいつは宮廷も陛下も騙してきた人間なのだ。発表される論文はみごとだったが、それもすべて神殿上がりの賢者と偽った結果だ。偽物の賢者でありながら、大賢者になりあがった。その罪は大きい。

ふと足のあいだにわりこませた膝をぐっと押し付けてやると、思わぬ反応が返ってきた。

（へえ……）

自分でもひとの悪い笑みが浮かんだ。

「今これだけお前の罪状を並べ立ててやってるのに、肝心の大賢者さまは過去をばらされたくらいで反応するほど淫乱なのか」

ぐにぐにと股間を押してやると、苦しそうに押し返される。勃起している証拠だ。

「違う。これは貴様が今押したからであって――！」

「他人のせいにしちゃうんだ。王国の誇る大賢者さまが。それはまずいんじゃないの？」

鎖骨まで見える純白のローブの胸元に指をかける。そのまま力任せに指を引き下ろした。

「やめ――！」

予想通り純白のローブは寝間着でその下には何も身に着けていなかった。腰帯（こしおび）のところまで破れたローブの上半身からはふわりとレスターの汗が香る。まるで堕落を誘う匂いだ。

「ッ、手を離せ……ッ！」

「ことわる」

腰帯をゆっくりほどいていく。金糸が贅沢に使われた美しい帯を抜き取ると、天に反りかえるレスターの竿が見えた。

「うわ。かわいいサイズ。ドリンに聞いた話通り、昔と全く変わってないんだな。大賢者さまのココは」
反りかえる細い竿を膝でつつぅ♡　となでると小刻みに震える。その様子がかわいくて何度も往復してやると、レスターの細い身体が前かがみになろうとする。
イキたがっている。
あの大賢者さまが。
議場で俺を議論でめったうちに刻んできた奴が、お子様ちんちんを膝でいじられただけで――
「出したいよなぁ？　でもこの程度で簡単にイったら、お前が遊び人確定ってことになるぜ？」
それでもいいのか、とこれみよがしに耳元で囁いてやると、両肩をび

くびく震わせて必死に耐えようとする。
「なあ賢者になった今でもあの頃のこと思い出すと身体が疼いたりしないのか？　なんでもドリンの角くわえこんだまま、スライムに尿道まで責められて、ガンイキしたって聞いてるんだけど」
「ッ　!!」
ぷ、しゅっ♡♡♡♡
当時の快楽を思い出したのか堰（せき）を切って射精しはじめる。お子ちゃまちんちんが前後左右に暴れまわって、そこらじゅうに精液を噴き出した。
「お～お～。盛大なおもらしみたいなイキっぷりですね。大賢者さまの射精。これはやっぱり遊び人確定ってことでいいのかな？」
「っ♡　ァ♡　ぁ、ぁ、ぁ……ッ♡」
イキすぎて気持ちいいのか答えはない。レスターのあごに手をやり、

顔を上向かせたまま唇を吸った。
キツい眼光で睨まれる。
「〜〜ッ !!」
歯を食いしばって抵抗してくるあたり、まだ認められないようだ。
己の状況を――
あごをがっちりと掴んで、強引に口を開かせる。酒臭い舌で口内を舐めると、碧眼が憤然と抗議してくる。
（いいねぇ。その、まだ堕ちてないって言いたそうな目……）
とろとろにして、せがませてやりたくなる。
悠然と見下ろしながら、膝でイキ途中のお子ちゃまちんちんをぐりぐりいじってやる。それだけでレスターの小ぶりな口から甲高い悲鳴が漏れた。

すべて俺の口で飲み込んでやりながら、舌をねぶってやった。
く――ぢゅぅぅう♡
ドリン曰く、こいつはゆっくりとした責めに弱い。時間をかければかけるほどうまくなる古酒みたいな味わいだと聞いた。
その言葉どおり、丹念にレスターの小さな舌を丸め込み、しゃぶりついては、口蓋から前歯の裏側までねぶる。
密着した身体から奴の腰がびくんと反応するのがわかる。
（賢者になってもエロい身体は変わってない、と――）
それが分かっただけでも楽しい。
今夜は一晩中、俺だけがコイツを可愛がってやる。たくさんイかして、どういう身体なのかもう一度初めから分からせてやる。お前は大賢者な

んかじゃなく、ただの肉欲に負けた淫魔同然のメスなんだと――

「っ♡　ッ♡　っ♡」

舌を吸われて悲鳴を上げるレスターの変貌ぶりをたっぷり味わってから唇を離した。

彼の射精でこちらのローブもひどいありさまだった。

「あ～あ。大賢者さまが子どもちんちんから精液びゅーびゅー振りまくもんだから、俺の宮仕えのローブも汚れちまった。これは舐めて綺麗にしてもらわないとな」

精液をたっぷり吸いこんで濡れたえんじ色のローブを、口元に押し付ける。

「ッ。誰がそのような真似、するものか！」

どうやらまだ自分の立場が分かってないらしい。

ローブを下げ、代わりに己のベルトに手をかけた。
「ふ～ん。舐めるだけで良かったのに。……今のを拒否するんなら、俺のムスコのお世話してもらわないとな」
チャックを引きずり下ろし、レスターの痴態でふくらんだ肉棒を取り出した。
「ッ」
レスターが息をのむ。
正直これほど自分好みのイイ反応をしてくれるとは思わず、睾丸ははちきれんばかりだった。精液がぱんぱんに詰まっているのが自分でも分かる。
太くそそり立つ肉棒はわずかに左曲がりで、勃起したせいか太い筋がいくつも浮き上がっていた。亀頭からは早く突っ込みたいとばかりに透

明の重たい先走りが漏れ、薄桃色の亀頭を濡らしていた。室内の明りでぬらぬらと光っている。
「やっ……なんだ、その……巨根は……ッ」
信じがたいものを見る目つきでレスターが驚きをあらわにする。
「お。今まで抱かれた男たちよりおっきくてびっくりしちゃった？」
ここまで太くなったのを見るのは俺も初めてだ。おそらく昔年の恨みとにっくき宿敵を抱ける征服欲に、今までにないほど肉欲が高まっているせいだろう。
さっさとぶちこみたい。
濃厚な口づけをかました時の反応ぶりといい、射精したときのイキっぷりといい、時間をかければかけるほどこいつは反応が良くなるタイプだ。おそらく乳首も弱いだろう。

ぶちこみながら指でつねったらどんな風にナカがうねるのか早く知りたい。
実験と考察を生業とする錬金術師ならではの学問的欲望と肉欲がまじりあって興奮がとまらない。
思わぬ事態に顔を青ざめるレスターにつめより、耳の裏側を指の腹でなでてやる。
「っ♡　ッ♡」
耳も弱いときた。
エルフの血が混じっていると聞いたが、そのせいかもしれない。
「ベッドで一晩中ぶちこんでほしいだろ？」
レスターの碧眼が潤(うる)んだ。青く揺らめく瞳の奥で奴が葛藤しているのがわかる。

遊び人としての肉欲と、宿敵に抱かれる賢者としての屈辱とがものすごい速度でグルグルとせめぎあっていた。

「なあ、ほしいのバレバレだぜ？」

最後通牒とばかりに、子供ちんちんの上へ俺の巨根を乗せてやる。精液のたっぷりつまった睾丸で押しつぶしてやると、奴の目が肉欲に負けた。

「――っ、は、ぃ……ッ♡」

屈するように奴の性器がうなだれた。

3　寝室にて

寝室に入るなり、最も忌み嫌う宿敵ヘンリックにベッドへ押し倒された。

ふかふかのマットの感触。日の匂いをたっぷり吸い込んだシーツは今夜も部屋の主に極上の眠りを提供してくれる……はずだった。

それも突然の来客によって消し飛んでしまった。

ビリビリに破かれた純白のローブはもはや寝間着としての機能を果たせない。内ももにはさっき自分の出した精液がべっとりとついていた。

「大賢者さまは身体も柔らかいって聞いたから、まんぐり返しもイケるんだろ？」

「ッ!!」
自分の股間が丸見えになるほど腰を持ち上げられる。奴の両肩に膝を担がれた。
大きく開かされた股間に奴が顔を寄せてきた。
「やっ！　そんなところ嗅ぐな、貴様ッ！」
「いやぁ俺が鼻くっつけるだけで、ちっちゃくなった穴をピクピク痙攣させてるの、カワイイね。そんなにとっとと入れて欲しいのかな？　大賢者さまのメスアナル」
膝を揺らされ、尻穴に何度も奴の口元がかすめる。そのたびに鼻息がかかり、くすぐったい。
（だいじょうぶ。問題ない。私は大賢者だ……。遊び人だった頃の感覚は新たな啓示を受けた時に全て捨てた。だからこんなことされたって感

じるワケが――）

くぱぁ――――ちゅるん♡

尻穴の周りを一気に舌で舐められた。それだけでさっき盛大にイッたはずのムスコが勃起しなおす。

「……ァ♡　ァ♡　、ダメッ」

「う～ん？　どこがダメ？　いつもみたく馬鹿な俺でも分かるように理路整然と説明してくださいよ。大賢者さま」

尻穴のまわりにある小さなひだをほじるように丹念にしゃぶられる。舌先でつつかれるたび、頼りない勢いでちんちんから薄い精液がぽたぽたとへそに垂れた。

「そ……ンな、こと、誰が説明する、かッ！」

息も絶え絶えに反論すると、ヘンリックが禍々（まがまが）しい笑みをたたえて黒

い目を細めた。
——ぢゅるるルるる♡♡
尻穴をこれでもかと強く吸われた。
入口のかたちが変わってしまうくらい吸いつかれて、精液がおしっこみたいに垂れ落ちた。
とどめとばかりに吸引する口から舌を突きこまれ、入口を入ったわずか数センチ。
この数年、とんと他人にいじられることがなかったごく浅い肉ひだをゼリーのように柔らかく熱い舌先でしゃぶられた。
「やァ♡　くっ、ンんッ♡　っ♡　ッ♡♡」
ぴゅくくくく♡
愛くるしい音を立てて、盛大にイク。そこへ極めつけとばかりに尻を

トントンと優しく小突かれた。
（やっ、お尻、弱いから……っ……だめ……待っ――!!）
ぴゅぅぅぅぅ♡♡　プシッ♡　プシッ♡
まるでトイレでおしっこを切る時みたいな音を立てて、自分の出した精液が腹じゅうに降りかかる。
むわりと寝室が自分の出した精液の匂いに染まった。もはや極上の眠りを毎夜提供してくれていた面影はどこにもなかった。
「ついでに大賢者さまのご尊顔も汚しとこうか」
むんずとヘンリックの手に性器を掴まれ、強引にしごかれる。久しぶりの太い男の指。身体はその指先から与えられる快楽を貪欲に吸い上げた。
あれだけイッたのにレスターの性器はまだヘンリックにおねだりしよ

うと、たちあがる。
「男の指くわえこんだら離さないって話、本当だったんだな」
「――だ、れがそのような世迷い言を……っ」
「え～、ドリンのおっさん。ドワーフのぶっとい指でしごいても全然言うことときかないムスコだったって聞いたぜ」
人さし指と親指の輪っかで細い肉茎を上下にしごかれる。笠の裏側にできた隙間を指先でほじられて尻が浮く。
「大賢者さまは淫魔の血がまじってるのかな。お腹にちんちん必死にくっつけようとして可愛いでちゅね～」
「黙れ。貴様こそ恥を知れ！」
こんなことをしてタダで済むものか。もう二度と祖国の土など踏めないようにしてやる。国王陛下の裁可を仰げば、こんなへぼ術師、簡単に

首を飛ばせる。その権力が私にはある。
新たな口撃を重ねようとした瞬間、どこからか聞き慣れた喘ぎ声が響いた。
「……え」
遊び人時代、パーティーの連中に遊び半分で録画された自分のセックス映像。
それを見ながらヤるのが、ドリンの十八番（おはこ）だった。けれどパーティーから抜ける際その手の映像はすべて始末した。精神に作用する魔術まで使い込んで連中の口を割らせて完璧に処分したのだ。
もうこの世のどこにもあるはずがない。
なのに『ソレ』は聞こえてくる。
「お。気づいちゃった？　ドリンのおっさんが餞別（せんべつ）にくれたんだよ。あ

んたとの隠し撮りセックス映像。本人も隠し場所忘れてたみたいでさ。パーティー解散後に気づいて、今もたまにオカズにしてるんだってよ」

ヘンリックがローブのポケットから黒い水晶玉を取り出す。そこから音声は響いていた。

『――ぁン♡　ぁン♡　ドリン、もっと奥、衝いて……ッ♡　前みたいにお尻の穴こわれちゃうくらいに、たくさん……出して』

まぎれもない自分の声だった。

甲高くて甘ったるい。己をくびり殺してやりたくなる卑猥な言葉の数々。

ヘンリックの目に狡猾な光が宿る。

「なんでも壁に映像を投影させたまま、ケツいじられるのが好きだったって聞いてるぞ」

ベッドの端に水晶玉を転がすと、寝室の天井一面にドリンに抱きつく自分の姿が浮かび上がった。当時の結合音まではっきりと録音されている。

目の前に五年前の堕落した自分が映しだされた。

『お尻……トントンして♡　そしたらドリンの、搾り取ってあげるから……ァァアッ♡　イイっ♡　イク♡　イク♡」

びゅるるるる♡♡

さっき自分が射精した音と寸分たがわぬ音声が再生されていく。

「……ッ……やぁぁァァァ――ッ！　消せ！　今すぐ消せ！」

「うを。腰にクるいい悲鳴♡　マジで前世は淫魔だろ。あんた」

くくっと楽しそうに笑うヘンリックを睨み付けた。視線に殺意を込められるものならいくらでも込めてやる。